

アクセス内在主義とメンタリズムの関係

小倉翔 (Ogura Kakeru)

一橋大学

認識的内在主義-外在主義は、過去数十年間にわたって、英米系の現代認識論にける検討の主要な関心の的であり続けている。なぜなら、認識的内在主義-外在主義は、《知識や認識の正当化の本性とは何か》ないし《どんな種類の要因が、信念のポジティブな認識的ステータスを決定することに関連するのか》といった、当該分野における最も基礎的な問題に係わるものだからである。

しかし、そもそも認識的内在主義-外在主義とは何であるのか。この問いに対する答えは簡潔に与えられることが多いが、しかし事はそう単純ではない。すなわち、認識的内在主義-外在主義を解釈する仕方には複数あるが、このうちのどの解釈をとるのか、そしていずれかの解釈をとるにしても、どうしてその解釈をとって別の解釈をとらないのかはしばしば言及されず、そうした解釈は事実上たんなる仮定ないし想定として取り扱われることも少なくないからである。

以上に関連して、本発表では次のことを検討する。すなわち、認識的外在主義を認識的内在主義の否定として捉えるとすれば、《認識的正当化が内在主義的な特徴をしている》と言うことは何を意味するのか、つまり、正確に言って何が何に対して内在的であるとされるのか。本発表では、この問いに対する答えとしてしばしば提出される二つのタイプの代表的な認識的内在主義、つまり、アクセス内在主義とメンタリズムを取り上げる。前者は《信念を正当化する要因は問題の個人にとって認知的にアクセス可能である何か、すなわち、信念者が気づいているか、または少なくとも気づくことができる何かでなければならない》とする見解であり、後者は《正当化は信念者の心的状態に依存ないしスーパーヴィーンしていなければならない》とする見解である。

本発表の展開は以下の通りである。まず、メンタリズムはアクセス内在主義を含意する必要はない、ということを明らかにする。次に、アクセス内在主義はメンタリズムを含意しなければならないとされることがあるが、それは正確ではなく、アクセス内在主義はメンタリズムを含意する必要はない、ということを明らかにする。両者の関係・違いをこのように明確化しながら、主として、どちらを認識的内在主義と捉えれば認識的外在主義との対比が浮き彫りになるかという観点から、メンタリズムよりもアクセス内在主義の方が認識的内在主義の説明としてより適切である（少なくとも、前者を後者より選好すべき十分な理由はない）、ということを明らかにする。